

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 久保田沙耶 |
| ヨミガナ | クボタ サヤ |
| 学位の種類 | 博士（美術） |
| 学位記番号 | 博美第524号 |
| 学位授与年月日 | 平成29年3月27日 |
| 学位論文等題目 | 〈論文〉 芸術における認知行動をめぐる物質文化の解釈的研究 〈作品〉 Material Witness（物の目撃者） 〈演奏〉 |

論文等審査委員

| | | | | |
|----------|--------|--------|--------|--------------|
| （主査） | 東京藝術大学 | 教授 | （美術学部） | 坂口寛敏 |
| （論文第1副査） | 東京藝術大学 | 准教授 | （美術学部） | 布施 英利 |
| （作品第1副査） | 東京藝術大学 | 准教授 | （美術学部） | 小谷 元彦 |
| （副査） | 東京藝術大学 | 准教授 | （美術学部） | シュナイダー ミヒャエル |
| （副査） | | アーティスト | （） | ミヤケ マイ ト |
| （副査） | | | （） | |
| （副査） | | | （） | |
| （副査） | | | （） | |
| （副査） | | | （） | |

（論文内容の要旨）

序章

本論文では、考古学者であるスティーブン・ミズンの「認知考古学上からみた『芸術・宗教・科学』の発現」の図を指標として、筆者の過去作品を「心の考古学」の側面から考察する。まず筆者の過去作品を4作品選び取り、作品を振り返りながら、各章のまとめでそれぞれの知能モジュールに当てはめて認知考古学の視点から作品の考察を試みる。今回はこの図に登場する「社会的知能」、「博物的知能」、「技術的知能」、「社会的知能と博物的知能」、「博物的知能と技術的知能」、「技術的知能と社会的知能」、「社会的知能、博物的知能と技術的知能」の7種類のケースに各作品を当てはめながら考察を行うこととする。作品それぞれがどのような知能モジュールを生かして制作されていたか分析することによって、自分が作品創作にあたり、どのような認知行動のなかで創作環境と向き合ってきたのか、また創造性の根源はどこにあるのか、そしてこれから筆者の創作活動がどこに向かうのかということを少しでも心の考古学の力を借りることによって明らかにできればと願う。

第1章-第4章

第1章から第4章までは、それぞれの章に一つの作品を振り分けて考察し、「章のまとめ」としてミズンの「認知考古学上からみた『芸術・宗教・科学』の発現」の図を指標として認知考古学の視点から作品の分析を試みる。第1章では、作品《ヒルネタリウム-惑星儀-》について、作品の一要素である「共有夢」をキーワードに著者が行ってきた宮崎県高千穂の夜神楽や、ジャコモッティの記憶板を例に挙げながら考察する。第2章では、作品《moon drawing》について振り返るとともに、「かたち」に対して図像学的アプローチから考察を深める。第3章では、作品《Missing Trace》について振り返るとともに、「芸術と供儀」をキーワードに宮沢賢治の『よだかの星』、坂口安吾の『夜長姫と耳男』をとりあげる。これらの文学作品と《missing trace》に関連して、ダホメ共和国におけるレグバ神の土偶、筆者が2011年にリサー

チ調査に行った長野県諏訪大社御頭祭の生贄の事例をとりあげながら、芸術における暴力と鎮魂は一体なんなのか考察する。第4章では、アートプロジェクト《漂流郵便局》の構造について振り返るとともに、関連性の高い岩手県遠野市にある『オシラ堂』の成り立ちについて遠野市立博物館の協力のもとリサーチを行う。アートプロジェクト《漂流郵便局》を続けていくにあたり、人間の文化は何か目に見える対象とコミュニケーションを深く取り合うことだけで生まれるわけではないと思うようになった。コミュニケーションの取れないものに対しても、止まない試行錯誤を繰り返すことこそが、文化の発生原理なのではないかと感じる。

終章

本論で、それぞれの作品をスティーブン・ミズンの「認知考古学における心の進化の図」と照らし合わせながら考察するなかで、過去作品が一体どのような構造で立ち上がろうとしているのか分析することができた。また、考古学の視座を借りながら作品を検証するにあたり、絶対的なひとつの真実、過去はこうであった、というような断定的な結論を下すのではなく、こうであったとすれば、というしなやかな仮説の構築をしていく考古学的アプローチの重要性を感じた。

そして、考古遺物や《漂流郵便局》に届く手紙一枚一枚のような個人的な「もの」、いわばそういう細部からの全体系をつくることは出来ないだろうかと考えるに至った。個人の記憶としてばらばらに存在するだけではなく、「われわれの記憶」と言い得るような全体の中に、むしろその一つ一つが息づいているような記憶と記憶の関係や相互の位置の取り方を見出すことは可能だろうか。「過去が照らし出す未来」という主題で人間の歴史感覚、ひいては歴史意識の感覚を変えていくことはできないか、今後考察を深めたい。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、筆者(=久保田沙耶)が、瀬戸内国際芸術祭で発表した作品「漂流郵便局」への分析・考察を中心として、その他の作品も含めた筆者の、これまでの芸術への思索をまとめたものである。

「漂流郵便局」とは、瀬戸内国際芸術祭が開催された小さな島、粟島において、旧郵便局の建物をギャラリーに見立て、そこに「漂流」してきた作品を展示したものである。粟島は、瀬戸内海の東西の海流がぶつかる島で、海からの漂流物が海岸に打ち上げられる。筆者は、そのような現実の環境における漂流物に加え、人の悩みや告白を綴った手紙もまた漂流物として捉え、それら人や自然の漂流物が打ち寄せる場としての郵便局を提示した。筆者は郵便局員としてレトロなデザインの制服を着て対応し、またスタッフには元郵便局長の男性も加え、虚と実がないまぜになった郵便局を演出した。

漂流郵便局に送られてきた手紙には、恨みや不満、時には不倫の告白まで、いわばかつての教会における懺悔室や、現代における精神科医の診察室のような様相も呈していた。そして「現代アート」という文脈の展示がされたことで、それは最近流行のリレーショナル・アートの作例としても評価できるものとなった。

筆者は、そのようにして自作「漂流郵便局」を分析・考察する。それに加えて、本論文においてユニークなのは、日本の東北地方における民俗学的な行事を取材・調査し、それを自身の作品へのアプローチに応用していることである。つまり、「漂流郵便局」を始めとする筆者の作品は、紛れもなく現代アートの分野に属するものであるが、それが同時に、日本の古来からの行事・祭りといったものと接続されるのだ。民俗学的な行事や祭りは、長い年月にわたって継承されてきた。いわば時代の波を乗り越えて生き残ったものである。またそれを行う人間も、いわゆる芸術家のような職業的で専門的な訓練・教育を受けたものでなく、村の若者や年寄りといった、芸術文化の観点からみれば素人たちである。しかし、そのような素人が継承する文化が、長い年月の波を乗り越え今に生き延びていることは、それは文化表現の成功事例という見方もできる。

筆者は、そのような日本の伝統行事や祭りというものの構造を、リレーショナル・アートともいえるべきスタイルの現代アートに接続することで、アートそのものの新しい未来を切り開く道として活用しようと模索する。

以上は、本論文で述べられていることと、筆者の作品を共に交えながら解釈・評価したものであるが、ともあれ本論文では、上記の観点から論考が展開されている。

「漂流郵便局」以外にも、「ヒルネタリウム-惑星儀-」（第1章）、「moon drawing」（第2章）、「missing trace」（第3章）、といった作品が取り上げられ、第4章において、いわば総まとめとしての意味ももたせつつ「漂流郵便局」の解説・分析がなされる。またそれらの事例を縦糸とするなら、もう一つの横糸として、スティーブン・ミズンの「人類の“心”の理論」に説かれた理論を対応させ、さらに独自の作品分析・解釈も試みられる。

そのようにして、筆者の代表作「漂流郵便局」を軸に、様々な視点からのアプローチが試みられたのが本論文である。この「漂流郵便局」の記録は、すでに小学館から同タイトルで出版され、社会的・外部的な高い評価も得ている。そこに筆者独自の素材を交えて書き上げた本論文は、博士論文として十分な内容を持ったものとして評価できる。よって、本論文を東京藝術大学の博士論文として合格とすることを認める。

（作品審査結果の要旨）

久保田沙耶は幼少の頃から考古学に囲まれた環境で生まれ育った。小さい頃、古代瓦を拾い、その文様の不可思議さに魅了されてから、現在までファウンドオブジェクトとしての物質への興味が続いている。これまでの作品はガラスや石、月の光、線香の火など自然物を扱い、ポエティックな作品を作り出して来たが、それらもファウンドオブジェクトによる表現として考えられるだろう。博士提出作品は自身の代表作である「漂流郵便局」で使用したオブジェクトを中心に、過去作である昼間の映像を鏡の反射によって断片化させて壁へ映し出す「ヒルタリウム」を含めて再構成し、展示をおこなった。

「漂流郵便局」は瀬戸内にある高齢化していく粟島を舞台としている。久保田は最初のリサーチで、波打ち際に集まる漂流している物質そのものに着目した。その後、ここへ辿り着いた自身もひとつの漂流物だと感じた。その後プロジェクトは本格的にスタートし、旧粟島郵便局を舞台として、宛先不明の手紙がこの場所へ沢山送られて来ている。集まってくる手紙は亡くなった人へ向けたものが多く、行き先のなくなった念や情が書き残されている。久保田によると、このプロジェクトとは「豊かに島を看取るアートプロジェクト」だと解釈している。この作品はこれまでの久保田の作品と違い、他者が介入することによって、ファウンドオブジェクトの概念が社会的に展開されている。そのため質疑応答で副査に他者との関係性が重要な作品として、リレーショナルアートとの関連を指摘されたが、久保田自身が拘っていたのは「物質」であった。このプロジェクト型作品は、集まってくる宛先のない手紙の内容と似て、喪失していく島へのディスコミュニケーションを前提としたささやかなるアプローチでありながら、念や情が吹き込まれた手紙という物質の最期をどのように扱うかというプロジェクトでもあったと考えられる。

そして久保田はイギリスの大学で修復の勉強もしていることが重要だ。修復物というのはかつての所有者や記憶をもった物質だが、大学では修復だけに留まらず、新たなものとマージさせる表現に取り組んでいたようだ。つまり、久保田はオブジェクトの制作、アートプロジェクト、修復においても一貫として、物質の終焉と永続性を芸術によって看取る方法を探求している。

久保田のアーティストとしての在り方は、物質の鎮魂のための触媒として機能しているだろう。その意味でも、論文で「漂流郵便局」と遠野にあるオシラ堂を比較するため、入念にリサーチし、このプロジェクトの終わらせ方と続け方のヒントとして考えている事も非常に高く評価された。特定の場を設定し、あの世とこの世の媒介とし、そこに集まる念や情が含有された物質が触媒としての久保田の手によってどう変化していくのか、今後の展開が十分に期待される。以上の考察を踏まえ、久保田沙耶は博士号にふさわしいものと判断できる。

（総合審査結果の要旨）

通学路でふと手に取った瓦の文様に大変魅了され、一夏その瓦を握りしめながら調べた。その文様が古代

瓦の文様であったという申請者久保田沙耶の幼少期の経験が、今につながる。

申請者の現地に赴いた民俗学や考古学に関わるフィールドワークは、修士課程入学以前から現在まで作品制作と同時並行に継続してきた。その中でファウンドオブジェクトへの執拗な興味が創造行為を誘発し、それらに命・心を吹き込む方法と、愛でるカタチを追求した結果、輝きある素材を一見装飾的に施したオブジェクト作品を多数制作した。イギリス留学では現在形の視点を入れた表現とも言える作品修復の手法と出会った。イギリス留学以前より申請者はこの修復の手法に近いオブジェクト作品を制作していたが、近年のアートプロジェクトにおいても物質の永続性と偶発性の両面から物の神秘に迫る表現を一貫して探求してきた。

アートプロジェクトの代表作「漂流郵便局」とは、届け先の分からない返事のない相手に出された手紙を受け付ける郵便局である。過去現在未来を通じて、ものことひと何宛でも受け付け、誰でもがそこで読むことができる郵便局を瀬戸内海に浮かぶ香川県栗島に開設し、2013年より瀬戸内国際芸術祭で発表してきた。栗島特有の漂流物や島の海運、及び郵便の歴史と関わった旧栗島郵便局に命を吹き込む再生の手法は、申請者のオブジェクト作品と同質のものであり、今までの研究が見事に結実したものとして評価される。

論文では「漂流郵便局」を中心に分析・考察するとともに、遠野のオシラ堂で行われる民俗学的な行事を取材・調査し、自作との関係を述べ、文化の発生原理についても考察が及んでいることは高く評価できる。また「ヒルネタリウム-惑星儀-」（第1章）、「moon drawing」（第2章）、「missing trace」（第3章）、といった作品が取り上げられ、スティーブン・ミズンの「人類の“心”の理論」と対応した相関図を作り、独自の作品分析・解釈が試みられた。

審査会では、申請者のこれまでの一連の表現活動を踏まえ提出された作品と論文が有機的に関係し合い、歴史的遺物を現代と近未来に解き放つ独自の手法を獲得したものであり、博士の学位を認めるに相応しい優れたものであるという評価で全員一致した。

ファインアートの領域において、独自の「修復と再生」の手法より「歴史的遺物である物質」に鎮魂と新たな命を吹き込む創造行為に意義を見いだす久保田沙耶の今後の展開に大いなる期待を寄せたい。